

イン・ザ・フォグ

## 第一部

### 一 メドウ

さわさわとメドウが揺れている。ヒナゲシやヤグルマギクの鮮やかな色が、夏の始めの夕陽に染められてアンバーがかった輝きを放ち、柔らかな香りの中をすりと吹き抜けてきた風に輪郭を滲ませている。一本のヒナゲシが、少し重たげなこうべを垂れた。と、青い瞳が目に入った。

レイチェルは音を立てぬよう、一歩だけ踏み出した。そつと顔を上げると、その青い瞳はじつと、レイチェルを見つめていた。レイチェルもじつと、青い瞳を見つめる。風が凧ぎ、たわんだヒナゲシの茎がわずかばかりカーブを緩める。青い瞳はその変化に合わせるよう少しだけ顔の位置をずらし、レイチェルを見つめ続けている。レイチェルの、真夏の天頂のように青く青く澄んだ瞳を。

オレンジ色に染まった情景の中で、際立つ四つの青い瞳が見つめ合う。レイチェルが、そしてヒナゲシの向こうの青い瞳が一歩ずつ前に出る。もう、五フィートと離れていないだろう。手を伸ばせば届きそうだ。レイチェルは口角にキュツと力を込める。同時に、心もち吊った目尻がわずかに下がる。見つめる青い瞳が、ヒナゲシの花に隠れるのを避けながら動いてくる。レイチェルは少し前のめりになり、そつと、右手を伸ばす。細く豊かなブロンドの髪が、はらりと顔に垂れる。伸ばした人差し指と中指の間を、ヒナゲシの華奢な茎がくすぐる。左手で、髪を掻き上げる。人差し指が、視線の先で輝く柔らかな毛に触れる。光を受けて透き通るようなシルバーの毛が、指の腹を優しく撫でる。レイチェルは思い切つて、半歩、すり足でそつと踏み出す。両手ですつぽりと包み込めそうな小さい頭を、ゆつくりと撫でる。猫は気持ち良さそうに眼を閉じ、斜め上に顔を突き出して恍惚の表情を浮かべる。

猫に名はないが、仮にステイングとしておこう。これまでの長い生のなかで、ステイングと呼ばれていた時間が最も長いからだ。だが、レイチェルはまだそれを知らない。それを伝えることのできる人間は、一人もいないのだから。

ステイングは、自分が美しいことを知っている。

ステイングの姿を目にすると、誰もが美しい猫だと思わずにはいられない。手を伸ばし、触れるだけで、男も女も、子供も大人も、年寄りできさえも、その豊かで滑らかな輝く毛並みに溜息を吐き、透き通る青い瞳に感嘆の声を上げ、うっとりとした目つきで後ろ頭を撫でる。

ステイングは、羨望と憧れを一身に受けて生きてきた。

そのステイングをして美しいと感じずにはられない人間の雌、それがレイチェルであった。彼女の瞳を発見してしまつたら、見ない振りをすることはできなかった。人間の美的感覚は理解できなかったが、レイチェルが際立つて美しいことは、出会つた瞬間から理解していた。もう、当分は人間と関わり合いになどなりたくないと思つていたことが、遠い昔のようだった。ほんとうに、遠い昔になつてしまつたのかもしれない。花に埋もれて眠つている間に、何日も、何週間も、あるいは何十年も経つていたのかもしれない。それだけ、ステイングにまつて時間というものは曖昧でつかみどころのないものだった。

メドウを吹き過ぎる柔らかな風が、仄かな甘い香りを運ぶ。レイチェルが眼を閉じ、鼻を突き出す。ステイングは真似をして、鼻面を突き出す。そんなことをしなくてもはつきりと匂いの正体がどの花なのかはわかつていたが、レイチェルの美しい仕草を真似したかった。

しばらくの間、一人と一匹はそうしていた。風と踊るように、レイチェルの白い指が伸びてときおりステイングのあごの下を撫でる。ごく自然に、ステイングはレイチェルに寄り添つた。

（私はステイングと呼ばれている。ほんとうは名無しとも言えるけれどね。君は？）

ステイングが自分の言葉で言つた。レイチェルが首をかしげる。もう一度、ステイングはその呼び名を言う。レイチェルが、微笑む。

「賢いのね。自己紹介をしてくれてるんでしょう？ わかるわ。残念ながら猫語はわからないけれど、あなたが何を言おうとしているのかは、どうしてだかわかるわ」

言葉は通じなかったが、心が届いた。そう、ステイングは思った。発音器官の不利を乗り越えて、心を通じ合わせることができたのだ。遠い昔、一度か二度同じような経験をした記憶がうつつらと残つていた。だが、人間たちが今ののように他人を顧みない暮らしをするようになって以来、こんなことはなかった。この美しい雌が混乱しないよう、今度は声に出さず自分の名を繰り返す。人間の出す音を真似ようとさえしなければ、口の形を作るのは簡単だ。この咽喉が、人間の言葉を発音できさえすれば……。そう、何度思つたかもしれないが、それが叶わぬ望みであることも、叶つてはいけない望みであることも、ステイングは知つていた。猫であるからこそ、姿形も声も匂いも疑う余地なく猫であるからこそ、これまでステイングは人間たちとの暮らしを成立させることができたのだ。

「私、レイチェルよ。あなたの名前は……わからないわ。どうしたらわかるかしら？」

ステイングは声を出さずに口を開け、人間が「ステイング」と発音するときの口の動きとそつくり動かし。あらん限りの頭脳をフル回転させ、人間の口の動きを思い浮かべながら動かし。

（ステイング）

ステイングはレイチェルの瞳を見つめ、もう一度ゆっくりと口を動かす。レイチェルは真剣

な眼差しで見えていたが、やがてふつと溜息を漏らし、笑った。

「うふふ。やっぱりわからない。でも、いつかきつとわかるよね。あなたがそんなに一生懸命自分の名前を覚えてくれようとしているんだもの。きつと……いつかわかる。そうだよね！」

ステイングはレイチェルの細く柔らかなふくらはぎに頬を擦り寄せる。レイチェル、とそのしなやかな名前を口ずさむと、咽喉が勝手にごろごろと鳴る。じつと目を閉じたまま、ステイングはレイチェルの存在の中で生きていく。こんな幸せに満たされた時間は、きつと、ゆつくりゆつくりと流れているに違いない。いつもの時間とはまるで違う上質な時間が、生まれたての花の香りのようにゆつくりと揺蕩っている。そうステイングは考えながら、レイチェルの体温を髭に覚えさせている。

このままずっと、このままでいいかもしれない。どこにも行かず、何も食べず、何も喋らず、レイチェルとずっとこの甘い匂いの中で暮らそう。

だがふと、ステイングの心に悲しい影がよぎる。レイチェルの柔らかな指の腹を避けて、花に顔をうずめる。四本の膝を曲げ、飛び退ける準備をするように屈む。もしもいつかレイチェルを傷つけてしまうのなら、ここで別れてしまった方がいい。そんな考えがどこからともなく浮かび、心の真ん中へ怒濤のように押し寄せる。溺れそうになったステイングの心は、それを必死で否定する。大丈夫、大丈夫だ。私は決してこの美しい存在を傷ついたりはしない。大丈夫、大丈夫だ。親猫が子猫に言い聞かせるようにゆつくりと、自分自身の心の中に言い聞かせる。花の香りをすすすつと吸って、心に安心を運ぼうとする。レイチェルが、小さな声で何かを歌っている。耳を傾ける。足に込めた力が徐々に抜ける。もう一度、レイチェルのふくらはぎに頬を擦り付ける。髭がたわんで、ぴんと撥ねる。

夕暮れが、もうそこまでできていた。レイチェルはそつとステイングを抱き上げる。レイチェルの想像どおり、猫は羽のように軽かった。ステイングはそのまま全身の力を抜き、レイチェルの甲に頭をもたれ掛かせて眠りに就いた。幸せで満たされた眠りに。

## 二 猫と王子

——グレートブリテン島北部

狩りは血をたぎらせる。人は、狩りをするために生まれてきたのだから。

時はスコットランド建国から数百年を遡る頃。辺境の王、ロイド三世は馬を駆り、野を駆け回る。狩りのシーズンに入って最初の満月を迎える夜、第二王子トリアンを抱く王妃アニースは、狩りの隊列からやや遅れた馬車に揺られて月を見上げていた。古よりのしきたりどおり、新たに生を受けた王子は狩り場で最初に迎える満月の下で祝福を受けるのだ。これまでの歴史

の中で、その満月が姿を隠していた祝福の夜は三度しかない。狩り場で祝福を受けられぬ王子には、必ずや過酷な運命が待ち構えているという。その言い伝えどおり、第一王子はその機会を逸したため幼少時に落馬し、生涯足を引きずることとなった。第二王子には決してその轍を踏ませぬため、王は国じゅうから呪術師を集め、決して曇らぬ満月の夜を選んだ。狩の成果を最大化させられる夜より、王子の祝福を優先したのだ。警護の者を増やし、馬車を入念に手入れさせ、馬には十分すぎるほどの飼葉を与えさせて、細心の注意を払いつつこの日を待った。ここ数日の天候は王を始めとした血族に不安を与えていたが、呪術師の予言どおり今夜の空はすつきりと晴れ渡っていた。赤子はいたって元気で力いっぱい乳を吸い、準備は万端と思われた。

「この子はきつと、強い王子に育つわ」

王妃が胸をしまう侍女に囁く。

「ええ、そして美しい王子様に、お育ち遊ばします。私のお乳を飲んでるんだもの！」

「ふふ、ありがとう、ネッサ」

「ほんとうに可愛らしい王子様ですこと」

侍女ネッサは赤ん坊の蔷薇色に輝く唇を幸せそうに見つめ、王妃の胸にそつと赤子を抱かせる。ミルク色の頬をピンクに染めたトリアンは、幸せいっぱいな微笑みを浮かべて母の胸で眠りに落ちる。滑らかな道が続ぎ、馬車はスピードを増す。すっかり離れてしまった王の隊列に少しでも追いつこうと、馭者が鞭をしなせたとそのとき、地面のあたりから鈍い音が響き、馬車が大きく揺れた。

「きゃっっ」

王妃の左手がネッサの肘をつかみ、ネッサの左手は肘掛けをしつかりと握る。不自然な車輪の振動に、二人は不安な顔で見つめ合う。

ガッ！

再び車輪が大きな音を立て、続いて馭者の叫び声が響くと同時に大きく傾がうと、馬車は走りながら横倒しになった。勢いで、扉のないキャリッジから二人は投げ出される。王子をしつかりと抱いた王妃の眼に、手綱を握ったまま宙を舞う馭者のシルエットが映る。

「きゃああああ！」

「アニース様っ！」

「トリアン！」

宙に投げ出された全員の体が、地面に叩きつけられる。ネッサは即死だった。王妃をかばい下敷きになった際に後頭部を打つたのだ。後続の警護の者が馬を降りて駆け寄る。

「ネッサ、ネッサ！ 王妃様は無事か！ 王子様は！」

「王妃様、王妃様ー！」

いずれの影からも返事はなかった。が、弱々しい呻き声に続き、赤子の泣き声が夜空を突き

抜ける。警護の者がネッサの身体を抱え起こし、息のないことを確かめたときである。風の音ではない、赤子の泣き声とももちろん異なる響きが、風に乗って届いた。だが、まだそれを気にする者はいない。

「王妃様」

警護の者は王子を抱きしめて離さない王妃を、そつと助け起す。

「王妃様、お怪我は」

「大丈夫、それよりネッサが怪我を……」

「いえ、ネッサは——」

「無事なのね」

「いえ、ネッサはすでに息絶えておりました」

「私を救つて、ネッサが」

王妃は震え、嗚咽を漏らす。王妃の無事を確かめ、三人の警護のうち一人が王の隊列に知らせるため馬に飛び乗る。走り出そうとした馬が、急に怯えたようにいなくな。

「ネッサ、ネッサ……」

「王妃様、あまり嘆かれても王子様が怖がります」

「お前はネッサの犠牲が悲しくはないのか！」

王妃が激昂する。王子が激しく泣く。そしてもう一つ、別の声がこだまする。

(続きは電子書籍でどうぞ)